大分県の民俗芸能（七）

染矢　多喜男

植野神楽（続）

19　鎮座

この神楽は神迎の幣差と同じく、拝殿へ出て折柳をする。けっかいを踏んで楽屋へ入る。

20　引入柴

玉・幣差・惣社の3名が先に出る。玉と幣差は床几に腰を掛け、惣社は出口に位置する。布津主神は榊に鏡・五穀・神宝を付けて担ぎ、引歌で拝殿の際まで出る。惣社と言儀を言う。惣社は立って玉の所に行く。玉に向って布津主神の言葉を言う。玉が答える。惣社は立って布津主神に向って玉の返事を告げる。布津主神祝詞を読んで立つ。榊を左右左に振って渡す。惣社は受取って玉に奉る。玉は受取って幣差に渡して祝詞を読む。読み終って立つ。布津主神も立つ。両名は伸上って3足後退する。坐って一緒に礼をする。玉は神へ向って拝礼して立つ。楽屋に入る。幣差は玉に続いて楽屋に入る。

惣社と布津主神の両名が残る。礼を終って立つ。2名で折柳をする。順逆をして方を取る。順逆をして水車をかやして坐る。拝礼して楽屋に入る。

21　綱御先

この神楽は幣差が先に拝殿に出て坐る。拍手を打って立つ。折柳をして早物になる。鬼神は杖と扇を持って引足で出る。拝殿の際まで行って構える。右・左・右を見てゆっくりかぶりを振る。鈴の手の方に向って横になる。かぶりを振上げて右袖を

はねる。幣の手にかやって舞込む。袖をはねて杖を左に、扇を右に持って引足で拝殿の際まで出る。身構をして右・左・右を見て、小かぶりを振る。拝殿へ足を踏出して幣の手にかやる。右手に袖をかけて身構をする。花道へ入って東方にかかる。扇を左右左に振る。かぶりを斜になって振上げる。袖をはねて杖をひねって東方に行く。幣の手にかやる。身をかわして右・左右の袖をかける。かぶりを振上げて右袖をはねる。幣の手に舞い身をかわす。足を踏止め腰を張って身構える。右袖をかけて鈴の手にかやる。楽屋の方へ舞込む。両袖をはねて構える。引足で出る。花道の方の取り方は皆同じ取り方である。

花道を終って拝殿へ出る。拝殿の舞い方は神前の舞い方と同じである。上段・下段が終って、鬼神は右袖をかけて花道より出る。順に舞って東方にかかる。左右左で構える。帯の手にかやって身構える。右袖をかけて西方にかかる。南方・北方にかかる。北方に杖を打込んで大蛇に打返えす。杖を花道の際に打返す。また、大蛇に打込んで花道へ打返えす。また、大蛇に打込んで花道へ打返えす。さぐるまねをして身構える。大蛇の所まで近寄る。大蛇を見てくるいをする。また、3度ほど杖を大蛇に打込んで花道へ打返えしてさぐるまねをする。このくるいの時は幣差は大蛇に腰掛けている。鬼神は杖を振上げて幣差の前を叩く。幣差は立って逆に舞う。花道の際で構えをする。また、杖を大蛇に打込んで行く。3度打込みをしてくるいをし、幣差の前を打つ。幣差は大廻りをし、大蛇に腰掛けて構える。鬼神は杖を振上げてもみ合う。大ぐるいをして幣差の前を杖で叩き、楽屋に入る。幣差は鬼神に続いて入る。

幣差・綱取と3名で出て順逆をする。綱取は綱を持って順逆をし、楽屋に向って構える。鬼神は襷をかけて出る。杖を振上げて、幣差の幣と打合せる。舞戻って打込む。大蛇を飛び越す。逆に追い順に追戻す。東方に杖を打込んで行く。大蛇は鬼神を巻く。左右左に隅に押込んで身構え、楽屋に引込む。幣差と綱取と出て、順逆して花道に向って構えて待つ。鬼神が出て打合いをする。身をかわして大蛇の頭に行きかかる。また、尾に行きかかってくるいをする。身構えて、杖を大蛇に突込んで行く。大蛇をはねかえす。逆に追い順に追って南方にかかる。杖を打込んで行く。大蛇は巻いて楽屋に引込む。幣差と綱取が出る。順逆して構える。鬼神は杖を幣に打込んで行く。身をかわして順に行きかかる。尾にかかってくるいをする。杖を大蛇に

突込んで行く。担いで投越そうとして、綱がはずれ、杖だけを担いで転ぶ。さぐるまねをしてくるいをする。廻って西方にかかる。西方に打込んで行く。大蛇は鬼神を巻く。左右左で隅に押込み、楽屋に引込む。引出され、叩き払って北方にかかる。大蛇から巻かれ、柱にくくりつけられ、幣差・綱取を追廻す。神殿へ向って倒れる。綱取は楽屋に入る。幣差と鬼神は言儀を言う。幣差は折柳をする。鬼の杖を貰って隅に坐る。鬼神は折柳をして楽屋に入る。幣差も同時に入る。

綱御先の幣差は拝殿に出てから終るまで、鬼神の後をつけて廻る。

22　思兼命

祝詞を読んで幣かんじょう（註1）をする。折柳をして坐る。3拝して、岩戸の右脇に坐る。

註1　神幣を供えること。

23　東方鬼

悪鬼は杖を両手で差上げて出る。順に舞って舞込む。右手に杖を持ち、左手を腰に付けてかぶりを振る。杖を左手に持ちかえてかぶりを振る。また、右手に持ちかえてかぶりを振る。魚を突いて東方に行く。方を見てかぶりを振る。岩戸に行きかかる。岩戸を見て、杖を岩戸の上からさぐりおろす。かぶりを振る。舞込んで杖を振上げる。杖で岩戸を打つ。

南方鬼・西方鬼・北方鬼は皆東方鬼の舞い方と同じである。

舞い終って、四方鬼は一緒に杖を突き、輪になって暴れる所作をする。そこに石古理留之命が太刀を腰に差して拝殿に出る四方鬼を見て太刀を抜く。切り込んで行く。悪鬼を退治して、岩戸に向って言儀を言う。順逆を舞って楽屋に入る。ただしつめ岩戸（註1）であれば太刀を岩戸に納める。

註1　舞った人が坐って控えている。他の時は舞った人は楽屋に退る。

24　太玉命

榊をかついで引歌で出る。言儀を言う。榊を左右左に振る。榊を岩戸に納める。扇を持ってずり足で静かに折柳を舞う。岩

戸の前に坐り3拝して楽屋に入る。

25　玉祖命

幣を持って出る。岩戸に向って言儀を言う。折柳を舞う。岩戸の前に坐り3拝して楽屋に入る。

26　長白羽命

弓を左に担ぎ右に矢をさか手に持ち、引歌で出る。言儀を言う。左足を1歩出して幣の手にかやりなめになる。トントントンで踏み切る。幣の手にかやり、両袖をかけてトロスコトンのトンで足踏みして岩戸前に行く。トントントンで踏み切って後退する。また岩戸の右に行って、踏み切って後退する。また岩戸の左に行って、踏み切って後退する。踏み切って幣の手にかやる。逆に舞って踏み切って鈴の手にかやる。順に舞って踏み切って幣の手にかやる。岩戸の前に行く。右の袖をかけてけっかいを踏んで退る。鈴の手にかやって、順に舞って踏み切って幣の手にかやる。岩戸の前に行って折柳をする。水車を3回かやして膝車を舞う。立って足を踏み揃えて順に舞う。踏み切って幣の手にかやる。岩戸の前に行く。踏み切って右袖をかけ鈴の手に3回小舞いする。右膝をつき屈んで終る。立って身構える。腰をすえて幣の手にかやる。鈴の手にかやる。弓矢を両手に捧げて岩戸の前に行く。背伸びして坐る。弓矢を思兼命に渡す。3拝して楽屋に入る。

27　宇須女命

幣と鈴を持って引足で出る。順に舞う。舞い込んで、岩戸に向って言儀を言う。逆に舞い順に舞う。舞い込んで岩戸の前に行く。足を踏み揃え、右の足をひいて斜めになる。チョオヒイヒイの囃子で切り込みをする。足を踏みかえ身をかわし、幣をまわして3回あおのいて立つ。逆に行き舞い込む。岩戸の前に行く。幣を横に置く。後退し、また岩戸の右脇に行く。後退して、岩戸の左脇に行く。後退して、花道の出口で切り構える。順に舞って折柳をする。順に舞い込んで幣を岩戸にむけて投げる。扇を拡げてくるいの手を舞う。岩戸の前に行って切り込みをする。順に舞い込んで、岩戸の前に行って後退する。岩戸の右に行って後退する。岩戸の左に行って後退する。順に舞い切り込みをする。ぎりぎり舞って坐る。3拝して楽屋に入る。

28　手力男命

大幣を担ぎ引足で出る。順に舞う。かぶりを振って袖をはね右膝をついて構え、言儀を言う。言儀が終れば立つ。かぶりを振り右足を踏み出して右の袖をはね、逆に舞う。舞い込んでかぶりを振り、順に舞う。岩戸に行きかかって身構える。かぶりを振って引足をする。石凝止命へ行きあたって身構える。太玉・玉祖・長白羽・鈿女命などに行きかかる。岩戸を見て大幣を岩戸に打ち込む。花道の方に打ち戻す。また打ち込んで、引布を幣頭にかける。幣を差上げて花道まで布を引き出す。身構える。岩戸まで後退してとび上る。また花道まで行って身構える。幣を岩戸に向って投げる。布を両手で持って岩戸の前に行く早摩を掛けて身をかわす。花道まで行ってかぶりを振る。岩戸まで後退して身構えをする。また花道まで行って身をかわす。布を肩から脇に廻して身体に巻く。岩戸にとりついてかぶりを振る。布を引きとって花道へ舞い込む。右膝をついて構え、言儀を言う。岩戸までさぐって行く。両手を岩戸にかけてあちこちと戸をひっぱる。注連縄を花道まで持って行く。岩戸に行ってかぶりを振る。花道へ行き、また身をかわして岩戸に行く。3回繰返してから岩戸を開く。坐って岩戸を拝む。思兼命も一緒に坐って拝む。但し、つめ岩戸の時はつめていた者が言儀を言って楽屋に入る。手力男命が後に残って岩戸をしめ、注連をかけて楽屋に入る。

29　七五三祓

摩を掛け毛頭をかぶり、太刀を2本持って早物で出る。順逆にぎりを舞う。しゅうぎょうを2回する。順逆にぎりを舞って方にかかる。方は切り込みどりにとる。方が終ればそのまま楽屋に入る。

30　綱口

御子神楽と同じ舞い方である。方が終ってから綱を招き出す（注1）。坐って3拝して楽屋に入る。

註1　扇と幣を前後に動かして招く動作をする。

31　大蛇退治

媼が媛を連れて先に出る。媛を上段へ置く。媼が折柳を舞って坐る。翁が出て折柳を舞う。媛を中にして坐っている所に、須佐之男命が榊を持ってさぐり足で出る。媛を見て言儀を言って楽屋に入る。翁と媼が楽屋に入って酒桶を媛の前に置く。大蛇が出て酒を呑んでいる時に須佐之男命が弓矢を持って出る。矢を射て身を隠す。柴垣から現われて大蛇を退治する。言儀を言って、媛を連れて叢雲へ入る。翁・媼は天安河原で折柳を舞って楽屋に入る。

32　湯立神随

順に舞って湯柱の下に坐る。拍手を打ち、祝詞を奏上する。3拝して幣を置く。立って左右左の切り込みの構えを3回する太刀を納めて坐る。おくまの米・御酒（おしき）・塩を3拝してかわらけに入れる。水を柱下にかけて立つ。けっかいを踏む。踏み方は大汐舞と同じである。舞い方は大汐舞と同じであるが、花を振る手から先がない。早物になって順逆をする。水車をかやして坐る。3拝して楽屋に入る。湯立神随では3名が湯釜の柱元に坐るが、地鎮神随は4名が4方の柱元に坐る。年回神随では4名が墓の4方に坐る。神随神楽の舞い方は凡て仝じである。太刀の左右左の切り込みは天地源明神律当社会の九字を切る。

33　湯御先

幣差が出て折柳を舞う。早物になってから鬼神が出る。花道から湯庭に出るまでは神前の舞い方と同じである。湯庭に出て方をとる。方は裏表にとる。並御先と仝じ掛り方で東方に掛る。杖をへねって東方に行く。袖をかぶって鈴の手にかやる。湯柱の元に屈んで柱を見る。袖をはねて身構えかぶりを振る。立って逆に舞う。旧位置に戻って幣の手にかやる。身構えて袖をかぶる。順に舞って旧位置に戻る。内にむいて杖をへねって袖をかけ、かぶりを振る。右の袖をはねて幣の手にかやる。左の袖をはねて引足で行く。南方にかかる。方の取り方は東方に同じである。東方は柱元、南方は火、西方は湯釜、北方は湯棒、中央は神棚にかかる。最後は八っ締め（註1）を賞める。八っ締めを賞めて袖をかぶる。楽屋に入る。引足で出る。これからは神前御先と同じ舞い方である。扇の手を終ってから東方にかかる。杖を東方に打込んで、そのまま湯柱元に打返す。地を杖で叩く。逆に舞う。順に舞って東方に打込んで行く。幣差が幣尻を鬼神の腋下にさし込んで腰を抱く。鬼神は幣尻を握って身

をかわし、幣差の首を抱いて湯釜の周囲を順にとび廻る。出口の真向いに押付け、幣尻を握って楽屋に引込む。

後段の鬼神が幣差を追って出る。南方にかかる。方は裏表に取る。並御先と同じ取り方である。南方は火、西方は湯釜、北方は湯棒、中央は神棚という順序に取る。湯棒にかかった時に湯棒に上って、杖を湯釜につけ、3回湯を振る。神棚にかかった時は杖を俵に打掛け、神棚から俵をおろす。俵持ちをする。村人が俵を持って力競べをしたり、鬼神が俵を担って走り廻ったり、俵を振廻しながら廻転する。坐って鬼神と幣差が言儀を言う。幣差が折柳をする。鬼神が折柳をする。鬼神・幣差が楽屋に入る。

註1　湯鉾から4方にはる注連縄をいう。1方に2本宛計8本ある。

34　一国一宮

一国一宮を読む。湯ささげが踏みつぎして湯釜に上る。幣を湯につける。神社の読切りに1社毎に湯初穂を供える。

35　鎮火祭

鎮火祭を読む。

36　火くぐり

東方から火の上を通る。東から南北という順に静に通る。次は蹴散らして通る。但し、湯御先が終ってから、塩振・湯大将後見人・大刀持・湯走の順に出る。湯走は笹を持って出る。氏神と宇佐宮へ湯を捧げる。

37　霊前御先

この神楽は墓の周囲で舞う。花道から扇の手の上・下段までは神前御先と同じ舞い方である。方を裏表にとる。扇の手の取り方は東方にかかって、杖をへねって行き右の袖をかぶる。鈴の手にかやる。内に舞い込む。墓を見て袖をはねる。逆に舞い順に舞う。袖をはねて内に向く。杖をへねって行く。右袖をかけ左袖をかけ右袖をかけてかぶりを振る。振り上げて右袖をはねて幣の手にかやる。引足で南方にかかる。方の取り方は東方と同じ。上・下段が終ってからの方の取り方は杖を東方に打込

んで行く。墓に折返して地を杖で打つ。逆に舞い順に舞い戻す。杖を振上げて内に向って打込んで行く。幣差は幣尻を鬼神の腋下に差込んで腰を抱く。鬼神は幣差の首を杖で抱き、幣尻を左手で握って墓の周囲を舞う。舞いすえて引込む。これから後段になる。鬼神は襷を掛けて幣差を追って出る。南方にかかる。方の取り方は神前御先と同じであるが、内外に取るだけます東方に準じて取る。言儀を言って舞い上げる。

38　御霊迎

御霊を墓地から神楽場まで迎える神楽である。舞い方は神迎と仝じである。

39　小一郎

4名が同時に拝殿へ出る。坐って拍手を打ち3拝する。2名ずつ折柳をして順逆をする。角より内に向って4名が行合って屈む。4名は各角で折柳をして方にかかる。方の取り方は鈴開と同じである。方が終れば順逆をする。水車をかやして坐る。3拝して楽屋に入る。

40　宝満

襷を持って出る。坐って拍手を打つ。襷で2名の折柳をする。順逆して方を取る。東方へ行って襷を打込んで屈む。後退して屈む。はねて立つ。打込んで後退してはねる。方の取り方は皆同じである。中央に打込んで襷を掛ける。両名は太刀を抜く順逆をしてしゅうぎょうを3回して方にかかる。東方に行く。太刀を振って外より内に向けて切込んで構える。順に舞って南方にかかる。方の取り方は皆同じである。中央に切込んで、順に舞って楽屋に入る。

41　神

拝殿へ出る。拍手を打つ。2名ずつの折柳をする。順逆をして太刀を抜く。順逆をして3回しゅうぎょうをする。太刀を納める。順逆をして東方にかかる。方の取り方は鈴開の方と同じである。方が終れば順逆をする。水車をかやして坐る。3拝して楽屋に入る。

42　皇矢文

弓矢を持って出る。トロスコトンのトンで足踏みして順に舞う。舞い込んで踏切る。逆に舞込んで順に舞う。折柳をする。長白羽命の折柳と同じである。方にかかる。方の取り方は隅から隅までとる。東方にかかる時は西方の隅からトロスコトンのトンで東方の隅に行く。トントントンで踏切り幣の手にかやる。西方の隅に行く。踏切って幣の手にかやる。順に舞って行く北方の隅で踏切って幣の手にかやる。南方の隅で踏切り、北方の隅に戻る。西、北方はこれに準じてとる。中央は神前に行って踏切る。折柳をして順逆をし、そのまま楽屋に入る。

43　剣舞

小太刀ともいう。坐って拍手を打ち、3拝して清祓を読む。太刀を左手に持って折柳をする。坐って太刀を置く。襷を取って立つ。目礼して後退する。順に舞って東方にかかる。方は隅から隅へとる。東方へ襷を打込む。はねて打込む。後退してはねる。逆に舞い順に舞って南方へかかる。東方に準じてとる。中央は神前に襷を打込む。襷で切込みの折柳をする。早襷をかける。舞込んで神前で坐る。目礼して太刀を拝んで抜く。両手で持つ。立って手を伸し後退して太刀を振る。順に舞い逆に舞ってしゅうぎょうを3回する。方をとる。太刀の手からは地割の中の手と同じである。方が終ればギリの曲舞をする。坐って太刀を納め襷をはずす。扇を持って立つ。順に舞って楽屋に入る。

44　御神楽

1名で出る。坐って拍手を打つ。3拝して立つ。折柳をして方をとる。鈴開の取り方と同じである。順逆をして坐る。3拝して立つ。順に舞って楽屋に入る。

45　地鎮御先

新築の所で舞う神楽である。花道から終りまで湯御先と同じである。方はすべて4方の柱元にとる。東方にかかれば杖をへねって行く。袖をかぶって順に舞込む。東方の隅の柱元で屈む。柱元を見て地を叩く。逆に舞い順に舞う。杖をへねって柱元

に行く。袖をかけてかぶりを振る。振上げて右袖をはねる。引足で南方にかかる。東方に準じてとる。上・下段が終って東方に打込んで打戻す。杖で地を叩く。逆に舞い順に舞って、柱に向けて切込みをする。幣差は幣尻を鬼神の腋の下に差込んで腰を抱く。鬼神は幣尻を握り杖で幣差の首を抱く。順に舞って隅に押込み、楽屋に引込む。

後段の鬼神が幣差を追って出る。2・3回追廻して南方にかかる。これに準じて方をとる。終って言儀をいう。舞上げをして楽屋に入る。

46　蛇迎

この神楽は外綱とも言う。前段は神迎の前段と同じである。前段の鬼神は幣差を楽屋に追込む。大太刀・小太刀・薙刀も楽屋に入る。後段は綱御先の後段と同じである。幣差と綱取を後段の鬼神が追って出る。2・3回追廻す。舞別れて身構えをする。中で行合って見合う。舞別れて中で出合う。上・下段をして突別れる。鬼神は蛇頭に行きかかり、尾に行きかかってくるう。杖を突きかけて担ぐ。蛇は鬼神を巻いて拝殿へかき上げる。以下は綱御先の後段と同じ舞い方で、舞い上げも同じである

47　鎮火法

火を釜に入れる前に清祓の祝詞を読む。地を順に　回撫でる。「身体ゴシンサンゲンカジキョウムジショウシンゲツショウミョウ大願成就ショウテンミョウガゴガ〇年〇月〇日〇時セイカショウジョムリョウレイホウシントカジ」の文を唱えて、釜に火を入れる。

鎮火にかかって、清祓と大祝詞を読む。

四、言儀

花神楽

東方木徳元霊之神
南方火徳元霊之神
西方金徳元霊之神
北方水徳元霊之神
中央土徳元霊之神

抑々、禁裡守護と申して神楽を日夜行えど宝のはちすに雨ぞ降る。これも無学の者やらん。天も清浄地も清浄、今この宮も清浄なり。東方を拝し奉るは甲乙(きのえきのと)が方なり。この方に神ましまします。女をば花のけっかいに参らせ候。ここを証と承け給われ。南方を拝し奉るは丙丁(ひのえひのと)が方なり。この方に神ましまします。女をば花のけっかいに参らせ候。ここを証と承け給われ。西方を拝し奉るは庚辛(かのえかのと)が方なり。この方に神ましまします。女をば花のけっかいに参らせ候。ここを証と承け給われ。北方を拝し奉るは壬癸(みずのえみずのと)が方なり。この方に神ましまします。女をば花のけっかいに参らせ候。ここを証と承け給われ。中央を拝し奉るは戊己(つちのえつちのと)が方なり。この方に神ましまします。女をば花のけっかいに参らせ候。ここを証と承け給われ。

壱人手房

これより東方を拝し奉る。南方を拝し奉る。西方を拝し奉る。北方を拝し奉る。中央を拝し奉る。〔以下、花神楽の言儀に同じ〕

弐人手房

御手房を手に取り給い拝むには

四方の神を花とこそよむ
御手房を見上げ見下し拝むには
葛城山の榊葉とよむ

地割

神仙「袖ひじて結びし水の凍れるは
春立つ今日の風や解くらん

抑々、天地開闢の次第あらまし申し伝え候。古天地分れず陰陽の分ちなく、鳥の子なすくぐもりてきざし含めり。その澄めるは燃え上りて天となり、重く濁れるは地となり、あえるは仰ぎやすしよごれるはかたまり難し。天先ず成りて土後に定まる而して神その中に生れませる御名国常立尊・国狭槌尊・豊斟渟尊・大戸之道尊・大富辺尊・面足尊・吾屋惶根尊・伊弉諾尊・伊弉冊尊、これまでを神世7代と申し奉る。伊弉諾・伊弉冊の尊天の浮橋の上に立たして共に計りて曰く、底っ下に豈に国無からんやと曰いて、天之瓊矛を以って滄海を掻き探り見給えど何んぞ矛に触れる物なく、その矛引上げ見給えばその矛の鋒より垂れる潮凝固りて一つの嶋となり、これを名付けて磯馭慮嶋と申す。陰陽の2神この嶋に天降りまして天の御柱・国の御霊・八尋之殿を化作ち給う。御名日神・水神・蛭子・素戔嗚尊。蛭子尊は3年を経れど足尚立たず、天磐橡樟船に載せて風のまにまに放ち給う。素戔嗚尊は勇み悍く安忍にして無道やとて根国底国に逐り奉る。なおみた万物造化の神、中にも5行の神と申し奉るは水火木金土5行にして、東方を司り給うは木神句句廼馳尊南方は火神軻遇突智尊西方は金神金山彦尊北方は水神罔象女尊中央は土神埴安姫尊、地の5行5神これなり。ひさかたのあまねくらきあらかねの国のそをなす、豊葦原国・千穂秋の瑞穂国・きし国・太そ国皆日本の惣号なり。この時国を33ケ国に分け給えども、あまり国数少きやと曰ひて66ケ国に分ち、1ケ国に1社の大社を崇め奉ること垂仁天皇の御代なり。それまでは神国にして国主は神道、元祖は神裔天照大神長く美国の世界を照らしとおり給うにや。なんぞ神道を尊きょうし奉らんか。ここに2柱の神は5行の御子を生れまし給えど、乙子の皇子西

よりよをいとをなきの戦と下い見ともあらははかせに見登り、御代太平に治めよとの仰せによりて罷り立ち、白妙なる幣帛を捧げかの道をさがし見登り見れば、案に違わず兄達4人は4方に4せつの城郭を構え、王子を切り立て合戦中はと見え候。神仙来ること私の事にあらず、帝の勅諚によって来り候。刀は鞘に納めしよりよをこまかにはってはいとをし奉らん。御静まり候へ。

東方　春立つというばかりしや御吉野の
　　山も霞みて今朝は見つらん
　春来れば水も心に任せけり
　　やをやらじは小山田の堰

南方　夏の夜は臥すかとすれば時鳥
　　鳴く一声に明くる東雲
　夏闇の暗き岩戸の溜り水
　　宵の螢に現われにけり

西方　秋萩の下の小草をさらわれず
　　色良き花の散るぞ驚きにけり
　秋来ぬと目にはさやかに見へねども
　　風の音にぞ驚きにけり

北方　冬は水二見ヶ浦の朝氷
　　解けぬ間こそ鏡とぞ見れ
　冬が来て山もあばらに見えにけり

小野の細道雪おれぞする

中央　剣とるももろはの山にわけ入りて
鳴りをしづめて春の音を聞く
吹けば吹く吹かねば行かぬ浮雲の
風に任する身こそ安けれ

抑々、東方木神句句廼馳神とは某がことなり。然れば東方は木徳のすべらぎを司りて東方大いにくらすといへど、いよいよ守るべき神仙の勅諚を全く以って違うべからず。

抑々、南方火神軻遇突智神とは某がことなり。然れば南方は火徳のすべらぎを司りて南方大いにくらすといへども、神仙の勅諚を全く以って違うべからず。

抑々、西方金神金山彦神とは某が事なり。然らば西方は金徳のすめらぎを司りて西方大いにくらすといへど、神仙の勅諚を全く以って違うべからず。

抑々、北方水神罔象女神とは某のことなり。然らば北方は水徳のすめらぎを司り、北方大いにくらすといへども神仙の勅諚を全く以って違うべからず。

抑々、中央土神埴安神とは某のことなり。然らば中央は土徳のすめらぎを司り、中央大いにくらすといへども、いよいよ守るべき勅諚を全く以って違うべからず。

神仙　大空は真丸にこそ見えるなり
角がなければかかる間もなき

中央五神「埴安媛命に申し渡すことの候。四土用のまびすくれば巽の山に駒ぞ臥す、夏のよすんはうたつ秋比つじの歩み。如何なれば冬とらうみの激しかるらんと3 4 12日は土用の土つかい、まったりゅうぎゅうけんまと申して4 6 24日を八せんのな

はづたいこれにて、御身いささかござあるまじきや。あんちのところ・ふくじゅうのところ・ちょとじ・とまりどころと聞こしめし候へ。東方木神句句廼馳尊に申し渡すべきことの候。春3月90日の中より18日抜き出し土用と名付け、残る72日を守護して御鎮まり候へ。南方火神軻遇突智尊に申し渡すべきことの候。夏3月90日の中より18日を抜き出し土用と名付け、残る72日を守護し御鎮まり候へ。西方金神金山彦尊に申し渡すべきことの候。秋3月90日の中より18日を抜き出し、残る72日を守護して御鎮まり候へ。北方水神罔象媛命に申し渡すべきことの候。冬3月90日の中より18日を抜き出し土用と名付け、残る72日を守護して御鎮り候へ。中央土神埴安媛命に申し渡すべきことの候。四季四節を合すればこれも72日に候へば、72日を守護し御鎮まり候へ。

御先

幣「神を假りにすがり給いしすめみまの神の御名こそ天降ります」（神前に向って）

八重雲を伊豆のちわきにちわき津の
みとも仕ふる諸やすの神

幣「出向ふ神は神なり。おもがちて神の御名こそきかば惜しけれ」（御先に向って）

御先「出向ふ神は神なりおもがちて
我れあらわさぬこの神の名を」

幣「葦原の瑞穂の国にさばえなす
荒振る神のたぐいならぬを」

御先「葦原の瑞穂の国にさばえなす
荒振る神のたぐいなるらん」

幣「日の御子に仕へまつりし天津神

名は天鈿女神をし」

御先「日の御子に仕へまつりし国津神。名は御先つかふる猿田彦神を知らずや」

岩戸

石凝止命「抑々、天照大神天の岩戸に籠らせ給えば日本常闇となる。その時4方8方より悪鬼来りて我が町を魔国となすと聞き申すによって、この鹿止の御剣を以ってやす〳〵と平らげ候。かようあやおき御剣をば天照大神に捧げ奉り、まず〳〵我等はひの叢雲に立ち入って候」

太玉命「ここにまた神の御宝とますみの鏡かざりの玉ひのすすをば天照大神に捧げ奉り、我等一かなば奏さばやと存じ候」

長白羽命「稲妻の光に行くや天の原

遙かに照らす雲の掛橋

ここにまた、神の御宝にますみの鏡かざりの玉五十鈴のひの鈴をば榊の枝に結び付け、我が住むべき方へ吹き寄せよと曰ひて投げ下し給えば、伊勢国度会郡山田川にも吹き寄せ給うなり。やがてひの川上に良き宮処あるなりとひたぶるに宮処定め、大神の出でいます時姫御子の御裾を濯がせ給うによって、みもすそ川と申す由。しばしこそ瑞山繁山茂るとも神路のおくに道もあるべきか、朝日差す夕日の西にかげ見えて我が為す業を誰か知るらん。まづ〳〵我等もひの弓矢を持って一かなじ奏さばやと存じ候」

女命「抑々、当社の御本地をかえり見るにりゃくいにんなそんりゅうし神徳円満なぜんしんと申す。かるが故に天に登りては日月みよをしんてん子孫と現われ、まった下界に降りてはその徳三界に至れり。国土万民を救わんため、天鈿女命は岩戸の御宝前に御神楽を奏さずやと存じ候」

手力雄命「露はしと露は草木に宿れしが

消えてぞもとの国ぎぬの原

手力雄命にて候は如何なる神明にてましますや」

思兼命「これに控えまつるは思兼神なり。戸取手力雄命にて候は今度の御子をやに立ち入り、天の戸をとり四方の世上に光をなし給え」

手力雄命「谷は八っ峰九っ戸は一つ」

思兼命「鬼の住とや荒らぎの里」

手力男命「今度この戸をとり」

思兼命「四方の世上に光をなし給え」

山　神

八尋「西の海青木が原の波間より
　　現われ出でし住吉の神」

山神「山深く踏み分け行けど道もなく
　　いずくにますや山の御神」

八尋「何神にて候」

山神「山神にて候」

八尋「山神の身として神楽場所に行かん」

山神「まづ〳〵榊を奉らん」

八尋「榊因縁なくては如何」

山神「なか〳〵因縁御座候。天照大神天の岩戸に籠らせ給えば日本常闇となれり。その時、諸々の神達集り給いて御愁傷あれども御出現なく、ここにゆうとをと申す。神曰く大山祇命のさわきに榊三本あり、一また申し受け岩戸の御前にかざり奉り、

12の掛歌を歌い八百処の御神楽を奏し奉れば、岩戸も開け、日本明かになり給うことひの榊の威徳にて候。まった榊と申し奉るは神代にては曲玉の木という。神皇にては中継木という。人皇にては榊という。まづ〳〵榊を奉らん」

大蛇退治

素戔嗚「それにましますは何神にて候」

翁「某は国津神大山祇の子にして脚摩乳・手摩乳・奇稲田姫という」

素戔嗚「何を以って愁歎するや」

翁「もと某8少女あり。年毎に八岐の大蛇出で来りて7人の姫を喰い、今またこの姫とられなんとす。故に愁歎するなり」

素戔嗚「その大蛇のみめ形は如何なるや」

翁「その大蛇は頭8つあり。面8つありて8丘8谷にまたがり、体上には数多の草木生い、動く時はさながら山も崩るるが如し」

素戔嗚「その姫を我に奉らんや」

翁「畏けれど御名を知らず」

素戔嗚「我こそ天照大神の弟武速素戔嗚尊にて候」

翁「然らば奉らん」

素戔嗚「奉るによっては大蛇を退治て候。大蛇を退治するには8つのたつぎを結い、たつぎ毎に8つの甕をいけ、甕毎にやしおりの酒を盛り、大蛇にすすむれば、大蛇浮き上りて飲まんとするを、この鹿正の剣を以って平らげて候」

素戔嗚「脚摩乳・手摩乳は天安河原にて御神楽を奏し給え。我は雲州簸の叢雲に立ち入って候」

五、沿革

拠るべき文献はないが、豊前岩戸神楽は伊勢神宮の神楽に源流を持ち、元亀の頃に、若簾神社（中津市植野）の祠官植野土佐守藤原外記が民衆化したものと伝える。江戸時代は神主のみが舞っていた。明治になって神主が舞わなくなり、農民が伝習して中期頃から舞うようになった。中津市や下毛・宇佐両郡および福岡県築上郡内の神楽社の多く、たとえば植野・日岳・福島・戸原・深秣・相原・黒土・友枝・麻生・時枝・北山の神楽は豊前岩戸神楽の系統であるという。植野神楽社は社家の秋満豊氏より伝授され、初代社長草葉嘉造から畑迫銀次郎を経て現社長秋吉義磨に至っている。現社員は秋吉義磨・武本要吉・久本時夫・奥名留免次・中川定行・大東日出男・永松成松・小野田高人・中川定利の9名である。全社は神楽舞方記載帳を伝えているが、原本は大正8年頃複写した際に紛失したという。

執筆者紹介

富来　隆
現住所　大分市志手1組
勤務先　大分大学教育学部教授
所属学会　日本社会学会・日本都市学会・史学会など。
論著　「邪馬台」女王国（関書院）・「丹生」旧石器・社会理解の方法的基礎・「西船東馬」など多数。

佐藤満洋
現住所　大分市田室町6組矢野ビル一〇七号
勤務先　大分工業高校定時制
所属学会　日本歴史学会・日本民俗学会・キリシタン文化研究会など。
著書　大分県近世庶民史料目録(一)（渡辺澄夫・北村清士・佐藤満洋共編）・「九重山稱麓の山の神(上)」（日本民俗学52号）
主要研究テーマ　検地帳の研究